

## 災 害

災害は火事・旱魃・冷凍害・津浪・山崩れ・地之り・流行病・虫害・洪水など種々あるが、近世以前に最も甚だしい損害を与えたものには地震と暴風雨・洪水であり、生活に余裕のなかった庶民は大打撃を被り、人々の苦しみは一層加わった。災害の償いはとても出来がたく、特に働き手を失った家ではますます貧困に沈み、仕方なくて土地を抵当にして借金するか、小作人となるかであり、小はいよいよ小となり、大はますます大となって大・小の懸隔けんかくは甚だしくなった。

### 地震

南海道大地震は既に天武天皇の十三年（六八五）十月十四日に起こっていることが日本書紀に見えている。

壬辰、逮于人定、大地震、举国男女叫唱不知東西、則山崩河涌、諸国郡官舍、及百姓倉廩、寺塔神社、破壊之類不可勝数、由是人民及六畜多死傷之、時伊予温泉没而不出、土左国田苑五十余萬頃、没為海、古老曰、若是地動未曾有也、是夕、有鳴声、如鼓聞于東方、有人曰、伊豆嶋西北二面、自然增益三百余丈、更为一嶋、則如鼓着者、神造是嶋響也

（日本書紀 卷第廿九、朝日新聞社刊）

その後四国地方では海底地震による地震がたびたび発生したが、記録に残るものうち一番大きかった地震は宝永四年（一七〇七）十月四日のもので、そのために起こった大津波は伊豆半島から九州にわたり、溺死者が非常に多かった。次は安政元年（嘉永七年一八五四）十一月十四・五日の大地震で、大坂にも大地震・大津波があり、撫養地方も大いに震い、徳長から鯛の浜までおよそ二里ばかりの間、大地が二尺程ずつ割れ、人家に洞穴があき、死人が多

近 世

く、大地の割れ目へ犬・牛・馬などが落ち込んで死に、これは稀代の珍事といわれた。津波が一丈四・五尺（四一五  
寸）の高さで撫養に襲来し、人家塩田は多くが浸水し、山西庄五郎の持船をはじめ多くの船が破損流失した。被害の  
最も大きかったのは岡崎で、潰家・焼失も多かった。浜御殿も焼失した。人々は皆近くの山々へ避難したが、岡崎だ  
けでも二〇人の流死があり、高島には一人（子供）の溺死者が出た。

大代村付近の被害については古老談として次の記録が残っている。

安政大地震

安政元貞年（嘉永七年安政と改元）六月の中旬（十六日）のころ、夜の九ッ頃―子の刻（十二時）ハッ頃―丑の刻（二時）生れ  
て始めての大地震で、夜中のこととて当惑して戸外へ逃げ出しました。（家には居ることが出来ませんでした。）その年はそれか  
ら大旱魃となり、草木は皆枯れまして村人は一生懸命に雨乞いをしたのですが（その年は）十一月まで雨がなく晴天続きで、麦  
あいに畑へ出て皆留守のとき十一月四日の朝四ッ時（巳の刻、午前十時）と思いましたが大地震があり、嘉久太郎は年十歳であ  
ったから寺子屋師匠平賀慶助方で手習の最中にゆり出したものですから六・七十人の生徒は皆外へ逃げ出しました。私の家の前  
の門外に長江新田の村へ注ぐ水道があるのでその水が兩岸へゆり揚げ、堀の中には水がなくなりました。翌五日も手習から  
帰って昼支度をして門外に居た八ッ時（午後二時頃）又々天地も覆える程の大地震があったので、其俣妻蒔溝へ倒れておりまし  
た。農夫も牛馬とも皆倒れておったということでした。しばらくして野から帰った父母が本宅を見ると、大破壊で潰家同然の姿  
となり、家族は皆寄り集って藪の中に居りました。未申（西南）の方向でドーンと地鳴りがしています。父から聞いた話  
では、昔、高知県で大地震があったとき地震で土地がゆれ込んで海となり立木も今にその海中にあるといわれています。此処も  
海岸だから海になるかも知れないと思っていると、大きなわめき声が聞えて「津浪だ津浪だ」と叫んでいる。聞くより早く北山  
の木津山や大代山へ家族一同が逃げ出し、祖母一人、下女も一しょに大代山へ逃げ私共は木津山へにげました。（大地震は何度  
も繰り返されたが十一月五日の烈震を代表して「安政の大地震」という）家族一同が集ることが出来たのは六日の夕でした。そ  
れから木津の長谷寺の庭前で半月位居りました。帰宅しても宅へはいることが出来なかつたからで、本宅・土蔵・納屋とも大破  
し、門から乾（北西）の角まで見通しとなりました。特に大困難したのは言の人や、年老けた人々で、地方によっては藁を運ぶ  
肥たごにのせ縄で大木に括りつけて置いて外の家族は山へ逃げたところもあるといえます。何分土地は裂け、古田分や川向新田  
では土砂水がふき出して一円に川となり、誠に恐ろしかったことを子供心にも深く感じました。（古老談 大津村誌）

暴雨風・洪水

二十十日・二十二十日のころ、暴雨風が襲来すると大降雨のため吉野川に洪水・氾濫が起こり、あるいは大風に伴  
って高潮となり、現在の鳴門市域内でもその害を受けることがたびたびであった。

元和元年（一六一五）四月二十七日、蜂須賀至鎮が大坂夏の陣に出陣の際、暴雨風に逢って沼島に避難したことがあ  
り、その後もたびたび洪水の被害があったことが歴史に残っている。以下「渭水聞見録」・「蜂須賀家記」・「阿淡年  
表秘録」・「阿波志」・「板野郡誌」・「大津村誌」などからその主なものを列挙してみる。

吉野川洪水記録

年月日	内容
天正 七・八	大水去らぬこと三日
万治 二	大風雨
寛文 二・六・二九	中四国九州に五〇年来の大風と高潮
延宝 元	大風水害田畠の流出甚大、免諸士收禄十一之半、阿淡兩國大雨洪水、山崩川筋麥 三晝夜にわたり大洪水、舞中島全戸流出
〃 二・八・一七	
〃 六	
貞享 四・九・九	
元禄 一四・七・一〇	
〃 一六	
宝永 四	
〃 七	
享保 六・八・一〇	五日間風雨大洪水、流失家屋九九戸、農作物減九万二千石、死者、牛馬多死
〃 七	
〃 一一	

享保	一三	(一七二八)
〃	一四・九	(一七二九)
〃	一五	(一七三〇)
〃	一六	(一七三一)
元文	三・六・二二	(一七三八)
〃	四	(一七三九)
〃	五	(一七四〇)
〃	七・二・六―七	(一七五七)
宝暦	七・七・一七	(一七五七)
〃	九	(一七五九)
宝暦	一	(一七六一)
明和	元	(一七六四)
〃	二・八・二	(一七六五)
〃	六	(一七六九)
安永	元・八・二〇	(一七七二)
〃	三	(一七七四)
天明	二―七	(一七八二―八七)
寛政	三	(一七九一)
〃	四・七・一九	(一七九二)
〃	七・七・八	(一七九五)

暴風雨大水害農作物被害甚大

洪水河堤決潰、國中農作物被害七万三千石

大風雨御蔵・給地共年貢御免  
板野郡全村出水による被害大

水旱に備えて諸郡に倉を造らしめ、年々米粟を貯え、二五万石に充てば新らしきと取り替える

國中洪水高潮一萬九千六百二十八石余損亡、「酉年の大水」という

洪水、農作物被害一萬七千石、死者八八、流失家屋七〇戸、藩士の俸禄は三年を限って半分を収む

以後天明・寛政年間にかけて洪水と旱害のない年なく、藩士の俸禄は以後四年の間十分の六を減ず  
連年洪水

板野郡地方大水害、堤防数か所破堤、田畑多く川成となり、大豆皆無、神社倒木、各地で秋祭礼出来ず

御国風雨出水、農作物被害一三万一千石

寛政	八	(一七九六)
〃	一〇・八―九	(一七九八―九九)
享和	元	(一八〇一)
文化	二・七	(一八一五)
文化	三・八・二	(一八一六)
文政	三・七	(一八二〇)
文政	二	(一八二九)
天保	四―八	(一八二九)
天保	一四・七・五―六	(一八四三)
弘化	四・七・一四	(一八四七)
嘉永	二・七・八	(一八四九)
〃	六・五中旬	(一八五三)
〃	七・二・五	(一八五四)
安政	三・八・一	(一八五六)
〃	四・七・一	(一八五七)
万延	元・七・一―一六	(一八六〇)

風雨出水

風雨出水、大幸・大代・吉永・徳永出水(夜間の洪水) (史料(一)参照)

御国風雨洪水、荒潮打込、稲大半立枯

大幸村風水害、立毛損亡(史料(二)参照)

丑年の大流れ

五か年間連続凶年(八年二月大塩平八郎の乱起る)天保八年八月―十月の五〇日間藩は米倉を開いて窮民賑救、藩命により天保五年から翌六年五月まで官営として「陰徳倉」を設置

二日間昼夜大豪雨七日に大洪水、五〇年来の大水といわれ、流失家屋多し。これを「七夕水」という

吉野川著名の大洪水となる

大風雨阿波全土に被災、大松・榎瀬・中島で破堤、板野郡では死者二五六人、流出家屋五六戸、収穫は平年の六分という。「阿呆水」という。

連日の旱天(史料(三)参照)

「寅の大水」。連日大津浪大地震で潰家数多あり(史料(四)参照)

「八朔水」という。

未曾有の大暴風雨、被災の模様江戸將軍の耳に達す。

七日間の大雨により洪水、阿波全土が大半浸水破堤各所にあり。撫養地方は第一の大損害を受け、台風高潮の被害で塩田・田島は浸水荒廃し家屋潰れ流失するもあり、岡崎十人家の家も汐に引かれ、処々の道路決壊して船の流失するものもあり、八月末の米の相場極々高直、新米一五〇匁、九月中旬には米八〇匁、節季には米一石二〇〇匁、麦一石一九〇匁、他國極上米一六〇匁、翌年正月米二八〇匁、麦

文久 三・八・一二 (一八六三)  
元治 元・八 (一八六四)

慶応 二・八・一 (一八六六)

二〇〇匁となり、他国麦を御国積込御免となる。撫養の油小売は九匁限り、卸店では一軒につき油三升限りしか売らず。当時の各村浦の被害状況を郡代に報告。  
(史料(四)参照)  
夜出水、板東谷川の堤防破損三〇余か所、六〇〇余間決潰。庄屋、勸農普請を出願(後文史料(六)参照)  
大暴風雨洪水、北方七郡では土佐白髪山を始め谷々の材木など流木多く、南山より北山一円地表一丈以上の出水。木津金比羅神社から徳島勢見金刀比羅神社までの如く、板野郡では板東以東の萱茅堤防大破、井利の箇所は池となり、川崎村富永建四郎宅及び酒蔵など家財悉く流亡、市場・馬詰・姫田・大幸・段関・大代・備前島・木津野を経て撫養川まで流亡した。  
七日間雨降り続き未曾有の大氾濫となる。田畑荒地と化し人畜農作物、堤防など大被害。これを「寅の大水」という。

なお、この外にも記録に漏れたものもあろうし、旱害・虫害もあったようである。  
吉野川は徳島平野の灌漑用水として大いに役立ち、特に洪水時に上流から運ばれた運積土は藍作にとって有効な肥料となった。しかし吉野川改修工事の進まなかった時は住民に洪水の被害を与えたことは計り知れないほどであった。ここに永年住みなれた人々は生活の知恵の中から少しでも高い場所を選んで、地盤を高くして家を構え、洪水のとき上流から流れてくる流木を防ぐために雑木林や竹藪を作り、中には屋根を萱葺にしたり、屋根裏に小舟を用意する家もあった。

史料(一) 文化拾貳年亥七月付

徳長村風雨出水に付諸損毛相調指上帳

一高参百六拾七石参斗 徳長村  
内高 百四拾六石八斗壹升貳合 損 毛

太兵衛 元	指 戸 相 損 し
一 小 井 利	指 戸 流 失
常右衛門行迫り	指 戸 相 損 し
一 同 井 利	指 戸 相 損 し
義衛門裏行迫り	指 戸 相 損 し
一 丞 助 元	指 戸 二 枚 の 内 一 枚 流 失
一 袴 越 井 利	二 枚 相 損 し 流 失 一 本
東堤へ相懸り	
一 和 久 立 吹 戸	
吉永徳長相合御普請場袖石垣相痛申候	
一 和 久 立	
一 大 手 石 垣 根 堀 所 々 に て 御 座 候	
一 居 宅	藤 兵 衛
一 納 屋	磯 次
一 納 屋	伊 勢 太
一 納 屋	常 右 衛 門

右は此度之風雨出水に付諸損亡帳面相認め差上候所相違無御座候  
以上

亥の七月

徳長村庄屋  
同村五人組

富 兵 右 衛 門 弥  
兵 右 衛 門 次 門 ④  
岑 次 門 ④  
周 作 門 ④  
平 蔵 門 ④  
幸 右 衛 門 ④

大幸村組頭庄屋  
福家為蔵殿

大幸村組頭庄屋  
福家為蔵殿

文化十二年亥七月  
板野郡大代村出水損亡仕上帳 (写)

一地高五百五拾八石式斗九升  
内式石

当立毛損亡

大代、木津、備前島、木津野、四ヶ村相合  
一堤長十三間 程上切

同所四ヶ村相合并利之上  
一堤長三間 程上切

大代、備前島、木津野、村相合  
一堤長四間 程上切

大代村夷相合  
一堤長二間半 程上切

合四ヶ所  
右者此度之風雨出水に付御損亡約仕上候様御触奉畏前段の通相約め其余御触に相当り申株無御座候に付帳面に仕奉指上候

福家為藏様

大代村庄屋 丈兵衛  
同村庄屋助役 茂右衛門  
同村五人組 富右衛門  
丹右衛門 甚之助  
伊右衛門

文化十二年亥七月  
大幸村風雨出水に付諸損亡指上帳

一地高八百參拾四石六斗八升參合四勺一才  
内 式百九拾式石壹斗式升式合

大幸村  
当立毛損亡

一堤四間半 一ヶ処腹崩  
一同拾間 五ヶ処上切  
一往還道 一ヶ処上切  
一倒木 二本

右者此度風雨出水に付当村諸損亡  
右之通逸に相調へ帳面指上申候 以上  
亥七月

大幸村庄屋 道右衛門  
同村五人組 民右衛門  
" " " " 佐右衛門  
" " " " 直兵衛  
" " " " 源次兵衛  
" " " " 虎藏

史料(口)

文政三辰年七月付  
大幸村風雨に付諸立毛損亡指上帳

福家為藏殿

稲毛押平し一步通之疼に御座候  
一小麦、粟稗之義総平し二三歩之疼に御座候  
一大豆、小豆、少々之疼に相成申候  
一茄子一二歩通之疼にて御座候  
右は去る晦日風雨に付諸立毛損亡相調申帳指上申処相違無御座候

辰七月七日

以上  
大幸村庄屋 道助

近 世

福家為藏殿

同村五人組 重右衛門 ㊦

史料④

先祖年代記

嘉永六年の大旱魃 高島の被害  
 一嘉永六年五月中旬より七月廿八日比迄之大旱魃ニ而一日之雨等も無御座浜人ハ元々田作之処迄も大ニ迷惑仕候浜方之儀ハ猶以塩菘匆三分ニ下落致し八月ニ休浜仕猶又冬三ヶ月休浜仕申候米百三拾三四匆麦九十七八匆ニ而浜人一統迷惑仕候尚又寅年塩下落ニ付八月ニ休浜仕候処少し塩相庭引立申候

史料④

先祖年代記

安政の大地震 高島の被害

寅年六月稀代大地震ニ而伊勢四ヶ市和洲奈良大坂越前福井諸国共大ニ潰家等多候而誠ニ大変ニ而候得共当国ハ少々之疼ニ候然ル処日曆十一月四日朝四ツ時大地震ニ而川ノ汐あびき三四尺も候ニ付村中騒動致し候処翌五日昼七ツ時ニ而大地震致候村中潰家多候塩浜之儀も大ニ床台共潰込候  
 尤五日夜方同十一日迄国中山ニ小家を建山ニ而七日之間暮し候誠ニ国中大騒動之上南方津浪之為ニ家引込候答田鷹之塩浜も津浪ニ引連荒浜ニ相成申候徳島通町紙屋町新シ町内町分出火ニ而大騒動ニ御座候尤而御座敷も出火仕候南小松島も出火不残焼失仕候当処儀ハ火ハ静ニ御座候誠ニ稀成大地震ニ而一統迷惑仕候尤此後地震致し候得者直ニ山ニ小家を建家事致し候事第一ニ候船ニ者乗間敷事尤紀州熊野方江戸迄乃浦々不残津浪ニ引候土佐儀も右同断ニ候翌卯二月方四国遍路御指留ニ相成申候  
 右大地震ニ付塩浜相察申候処当処分長崎徳太郎浜私所持之塩浜表四十枚卜竹嶋浜八十枚程相察申候三ツ石新浜南浜立岩弁才天村右村之分ハ大疼ニ御座候其奈ハ少々宛之疼候  
 此後地震致候得者川ニ氣を付汐あびき候得者早々山江上ル事決而地震之節ハ船ニ乗間敷事 (鳴門市 福永周市蔵)

史料⑤

萬延元申年(一八六〇)七月廿二日

去ル十一日夜方十二日朝迄風雨高汐ニ付撫養地村浦之内汐入ニ而御損亡ニ相成候株々取約書上帳

撫養 組頭庄屋共

萬延元申年七月廿二日

去ル十一日夜方十二日朝迄風雨高汐ニ付撫養地村浦之内汐入ニ而御損亡ニ相成候株々取約書上帳

撫養 組頭庄屋共

万延元年撫養地村浦大風雨高潮による損亡記録 鳴門市 山田喜昭蔵

南浜村

一高五百六拾七石式斗三升九合 同 御損亡  
 内高貳百九拾六石八斗壹升  
 残而貳百七拾石四斗貳升九合  
 一塩浜堤切 拾式ヶ所 明 神 村  
 一高貳百四拾貳石五升 同 御損亡  
 内高九拾九石式升七合  
 残而百四拾三石式升三合  
 一塩浜堤切 貳拾ヶ所 潰 塩  
 一建 塩 千五百俵 流 失  
 一石 炭 四千貫 高 嶋 村  
 一高九拾九石六斗七升 座 候  
 一塩浜井利 拾七ヶ所  
 一同 堤切 貳拾八ヶ所  
 一建 塩 千三百六拾俵 潰 塩  
 一石 炭 壹万七千貫 流 失  
 一水潮土蔵 壹ヶ所  
 一潰 家 壹ヶ所  
 一高三拾五石壹斗八升 汐不入疼無御座候  
 一塩浜堤切 八ヶ所  
 一石 炭 貳万三千貫 流 失

一高三百拾五石九斗三升七合七勺五才  
 内高百七拾石五斗七升五合 汐入御損亡  
 残而百四拾五石三斗六升貳合七勺五才  
 一島地堤切 壹ヶ所  
 一塩浜堤切 八ヶ所 斎 田 村  
 一高六百七拾八石九斗三升六合五勺七才  
 内高三百三石四升 同 御損亡  
 残而三百七拾五石八斗九升六合五勺七才  
 一塩浜堤切 六ヶ所 黒 崎 村

近 世

一 塩浜井利	壹ヶ所		
一 高百拾七石七斗式升六合			小嶋田村
内高三拾石七斗八升		同 御損亡	
残而八拾六石九斗四升六合			
一 塩浜堤切	式ヶ所		大桑嶋村
一 高百五拾六石七斗四升壹合			
内高百九石五斗壹合		同 御損亡	
残而四拾七石式斗四升			
一 島地堤切	壹ヶ所		
一 塩浜堤切	式拾三ヶ所		
一 竈 屋	壹軒		
一 塩納屋	壹軒		小桑嶋村
一 高百拾六石八升六合			
内高七拾壹石八斗八升六合		同 御損亡	
残而四拾四石式斗			
一 勧農井利	壹ヶ所		
一 塩浜堤切	八ヶ所		
一 潰 家	壹ヶ所		弁才天村
一 高三拾五石九斗九升式合			
内高式拾九石式斗七升式合		同 御損亡	

残而六石七斗式升			
一 高三斗壹升五合			同
但新開分			
一 島三反六畝式拾四歩			同
右八御積米麥付之株			
一 塩浜堤切	七ヶ所		
一 同 井利	壹ヶ所		北浜村
一 高三拾式石式斗八升七合			
内高拾四石三斗五升三合五勺		同 御損亡	
残而七石九斗三升三合五勺			
一 塩浜堤切	壹ヶ所		立岩村
一 高式百三石三斗六升八合			
内高百九拾壹石壹斗六升八合		同 御損亡	
残而拾式石式斗			
一 島地堤切	壹ヶ所		
一 塩浜堤切	五ヶ所		
一 高四拾五石四斗三升八合			岡崎村
一 勧農堤切	壹ヶ所		
一 潰 家	五軒		
一 破 船	九艘		
一 倒 木	式拾本		

2 藩政のあゆみ

一 高千三百七拾八石九斗九合六勺			里 浦
内高七百五拾八石三斗八升三合		同 御損亡	
残而六百式拾石五斗式升六合六勺			
一 田五町壹反三畝式拾壹歩		同 御損亡	
但御積米七石三斗九升七合之株			
一 勧農堤切	五ヶ所		
一 破 船	式拾艘		
但活船楫取船			粟津浦
一 高百六拾四石八斗壹升八合			
内高百五拾式石壹斗壹升三合七勺七才		同 御損亡	
残而拾式石七斗四合式勺三才			
一 勧農井利	壹ヶ所		
一 同 堤切	三ヶ所		堂 浦
一 高三百四拾九石六斗九升			
内高六拾五石三升四合		同 御損亡	
残而式百八拾四石六斗五升六合			
一 破 船	拾六艘		
但漁船楫取船			

惣高合四千五百四拾石六升八合九勺式才			
内式千貳百九拾壹石九斗四升三合式勺七才		沙入御損亡	
残而式千貳百四拾八石壹斗式升五合六勺五才			
外二			
五町五反拾五歩			里 浦
御積米麥付			弁才天村
同高三斗壹升五合			新 開
一 勧農堤切	九ヶ所		
一 同 井利	式ヶ所		
一 島地堤	三ヶ所		
一 塩浜堤	百式拾八ヶ所		
一 同 井利	拾九ヶ所		
一 建 塩	式千八百六拾俵		
一 石 炭	四万貳千貫		
一 竈 屋	壹軒		
一 水潮土蔵	壹ヶ所		
一 塩納家	壹軒		
一 潰 家	五軒		
一 破 船	四拾五艘		
一 倒 木	式拾本		

右者去ル十一日夜ノ十二日朝迄風雨高汐大浪立ニ而撫養地村浦之内沙入ニ罷成候田島諸立毛御損亡塩浜堤切其餘諸株之株々取約奉差上候 以上

申七月廿二日

岡崎村与頭庄屋  
田 淵 岡 兵 衛 ㊦  
大 桑 嶋 村 右 同  
加 納 達 郎 ㊦  
明 神 村 右 同  
綱 木 秋 平  
堂 浦 右 同  
米 田 吉 助

板野勝浦

御郡代様御手代

村 田 芳 郎 殿

園 木 辰 之 丞 殿

仁 木 万 次 郎 殿

(鳴門市 山田喜昭蔵)

万延元申年七月

当月十二日晝高潮ニ而御損亡取約仕上帳

木津野村与頭庄屋

吉 成 新 平

一 高八百九石六斗五升九合

内八拾石九斗六升五合九勺 御損亡高

木津野村

但去十二日晝之高潮撫養川筋吉永村新池川へ押込右村鷺嶋傍示一円潮入其余端々越シ潮ニ而相疼候分彼是尅歩位之疼ニ御座候

一 同五百三拾三石式斗五升七合

内四百七拾九石九斗三升尅合三勺 御損亡高

吉永村

但右同断右村大手堤高潮式尺方三四尺斗惣上り越シ仕村中尅円数々潮漬りニ相成稲毛鼠物立毛枯腐尤居屋敷添等之土地高处  
疼少も分取集大綱尅歩通位之取□も可召御座候分先只今之於様村中押平九歩通位之疼ニ相見申候

一 同三百六拾八石五斗尅升三合

但右同断右村大手堤破損高潮押込村中一円都而潮漬ニ相成居屋敷添土地高处ニ迄諸立毛枯腐作物皆無ニ相見申候

徳 長 村

一 大毛堤破損 長式十七間 取集 四ヶ処

一同上ッ切レ 同 五十間 同 四ヶ処

一 高三百五拾尅石七斗三升六合

内三十五石尅斗七升三合六勺 御損亡高

矢倉野村

但右同断右村川向新開之場所潮漬大疼相成其余越候潮越疼とも彼是取集尅歩通位之疼ニ可有之候

一同九百七拾五石七升九合五勺

但右村之義土地縁り雇寄之分一旦ハ潮指ニ罷成候へ共立毛之障相見不申村中無難ニ御座候

木津村

一同三百九十石式斗三升六合

但右同断村中一円無難ニ相見申候

備前島村

一同五百式拾尅石四斗式升三合

但右村之内夷野傍示一旦潮指ニ罷成候得共稲毛取実ニ相拘り候ニハ相見不申無難ニ御座候

大代村

一同五百九拾五石五斗四升式合

但右同断之運ニ而先無難ニ相見申候 以上

段関村

右者去十二月晝之高潮ニ而当組村々諸立毛御損亡之運大綱取約御指上候 以上

木津野村与頭庄屋

吉 成 新 平 ㊦

申七月廿四日

板野勝浦

御郡代様御手代

園 木 辰 之 丞 殿

(鳴門市 山田喜昭蔵)



萬延元年申年七月

当月十一日夜方十二日朝迄之風雨出水並高潮ニ付組村々御損亡相仕出上帳

東馬詰村与頭庄屋

賀川盛之助

一地高五百四拾四石九斗四升九合六勺

内三百八拾壹石

牛屋島村

一地高四百八石四斗式升五合八勺三才

内百九拾六石四斗九升式合三才

東馬詰村

一石破戸式ヶ処

破損

同四石八斗五升

砂入上流共

一堤石垣拔崩五間

右同

一田畠六町壹反五畝廿七步

砂入上流共

一関流式ヶ処

右同

一堤拔崩犬走りと拾五間

破損

一土橋五ヶ処

右同

一土橋三ヶ処

右同

一地高八百三拾九石式斗八升八合壹勺五才

大幸村

一地高百三拾式石七斗九合式勺式才

中馬詰村

内八拾三石九斗

当立毛損亡

姫田村

内拾九石六斗九升六合九勺

当立毛損亡

一地高八百五拾石四斗壹升七合

当立毛損亡

大谷村

一田畠六町六反八畝十五步

但假御檢地立毛皆無

内百七拾石八升三合四勺

当立毛損亡

池谷村

一地高四百八拾石

内四拾八石

当立毛損亡

一地高三百拾五石六斗五升七合式勺

当立毛損亡

高畠村

一地高四百三拾四石六斗式升五合

内式百拾三石壹斗三升

当立毛損亡

内九拾四石六斗九升七合壹勺六才

当立毛損亡

松村

一地高三百四拾六石式合

内七拾石

当立毛損亡

一地高四百拾九石四斗五升五合四勺四才

破損

池谷村

一地高四百三拾四石六斗式升五合

内四拾八石

当立毛損亡

右者毛損無之候

右者毛損無之候

池谷村

一地高四百三拾四石六斗式升五合

内四拾八石

当立毛損亡

一地高四百壹石六斗式升三合

破損

高畠村

一地高四百三拾四石六斗式升五合

当立毛損亡

右者毛損無之候

右者毛損無之候

高畠村

内式百拾三石壹斗三升

当立毛損亡

一倒木壹本

同拾壹石三斗式升

砂入上流とも

同拾壹石三斗式升

砂入上流とも

一地高四百三拾八石壹斗三升六合三勺

破損

松村

一地高三百四拾六石式合

当立毛損亡

右者毛損無之候

右者毛損無之候

松村

一地高三百四拾六石式合

当立毛損亡

右者毛損無之候

右者毛損無之候

松村

一地高三百四拾六石式合

当立毛損亡

一堤川除石垣拔崩犬走りととも百間 破損  
 一和久巷ヶ処 右同  
 一石破戸壹ヶ処 右同  
 一蛇籠式百五拾本 右同  
 一地高三百五拾八石八合 江尻村  
 内百七石四斗式合四勺 当立毛損亡  
 一地高七百七拾五石七斗五升式合七勺 中村  
 内百貳拾石 当立毛損亡  
 同拾石 砂入上流とも  
 一堤拔崩とも百拾間 破損  
 一萱野川成三反 破損  
 一地高七百拾八石五斗八升 北村  
 内式拾四石四斗九升四合四勺 当立毛損亡  
 一田老町四反壹畝拾八歩 倒木壹本  
 但御檢地之内立毛皆無

惣地高合七千七百拾三石六斗式升九合四勺四才  
 内千五百七拾八石八斗九升六合式勺九才  
 同貳拾六石壹斗七升 当立毛損亡  
 田畠拾四町貳反六畝 砂入上流とも  
 但假御檢地負当立毛皆無  
 堤川除石垣拔崩犬走りととも貳百三拾間  
 和久巷ヶ処 破損  
 関流式ヶ処 右同  
 石破戸三ヶ処 右同  
 蛇籠式百五拾本 右同  
 土橋八ヶ処 右同  
 倒木壹本 右同  
 萱野川成三反

右者当月十一日夜方十二日朝迄之風雨出水并高潮ニ而御損亡ニ相成候品々組村々取都指上申候 已上

東馬詰村与頭庄屋

賀川盛之助 ㊦

申七月

板野勝浦

御那代様御手代

村田芳郎殿

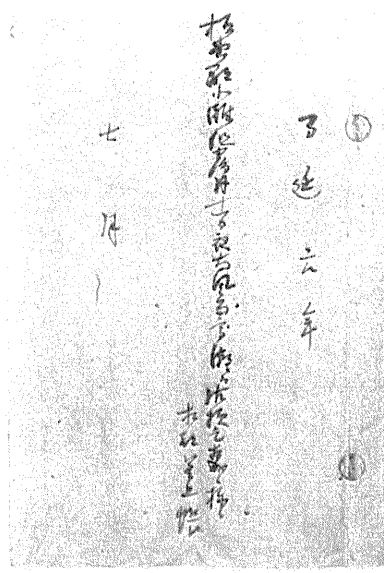
園木辰之丞殿

仁木万治郎殿

万延元年七月

板野郡北灘組当月十一日夜大風雨高潮ニ而御損亡相成候様ニ相都差上帳

- 一 高六百貳拾五石九斗九升三合 榑木村
- 但田作畠作共仕付高
- 一 内百貳拾五石壹斗九升八合六勺
- 但稲作畠作共相成之生シ方ニ相見得候所度々之大風雨出
- 水ニ付大綱押平式分通御損亡ニ相見付居申候
- 一 同貳百五拾貳石九升 粟田村
- 但右同断
- 一 内五拾石四斗壹升八合
- 但右同断運ニ御座候
- 一 高六拾貳石九斗四升 大浦村



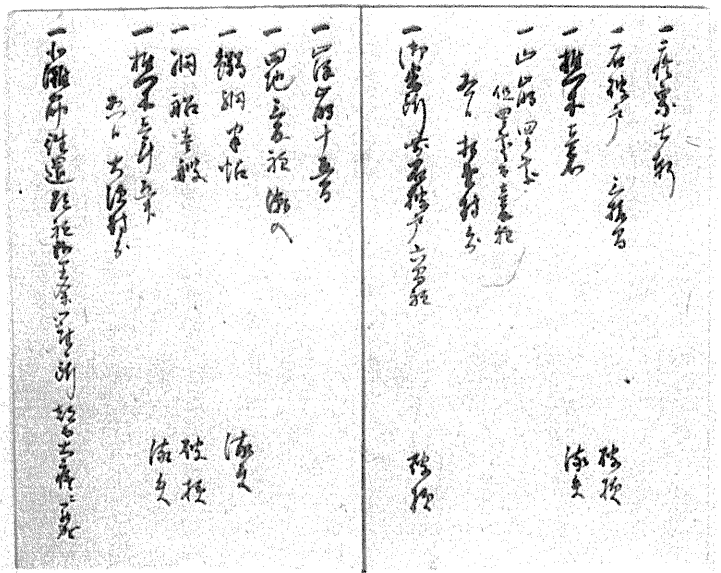
万延元年北灘組大風雨高潮による損亡記録 鳴門市 山田嘉昭蔵

- 一 同三拾貳石八斗八升 宿毛谷村
- 但右同断
- 一 同拾四石七斗七升 鳥ヶ丸村
- 但右同断
- 一 高合百拾石五斗九升
- 内式拾貳石壹斗壹升貳合
- 但前同断運ニ而御座候
- 一 高七百貳石九斗八升九合 折野村
- 但右同断
- 一 内百四拾石五斗九升七合貳勺
- 但前同断ノ運ニ御座候
- 一 同四拾石八斗貳升 大須村
- 但右同断
- 一 内八石壹斗六升四合
- 但前同断ノ運ニ御座候
- 一 高五石壹斗 基浦村
- 但右同断
- 一 内壹石貳升
- 但前同断ノ運ニ而御座候

惣高合千七百三拾七石五斗八升貳合内御損亡高

- 一 合三百四拾七石五斗壹升六合四勺
- 一 松樵木 五本程 流失
- 一 小束松葉 六千束余 右同
- 一 疹家 七軒
- 右八粟田村分
- 一 稲毛潮入田地五町
- 内三町程八稻株たへ候様相見得居申候
- 一 潰家 壹軒
- 一 疹家 七軒
- 一 石破戸 三拾間 破損
- 一 樵木 壹石 流失
- 一 山崩 四ヶ処
- 但四ヶ処ニ而壹反程
- 右八折野村分
- 一 御番所前石破戸 六間程 破損
- 一 崖崩 十五間
- 一 田地三反程 潮入
- 一 罫網 半帖 流失
- 一 罫船 壹艘 破損
- 一 樵木 壹斗五升 流失
- 右八大須村分

一 北灘筋往還道程式里余御座候所都而大疼ニ罷成通行も難相調候様罷成候得共村々々取繕為仕仮成ニ通行仕居申義ニ御座候右之通北灘八ヶ村之内立毛御損亡并其余損亡有之候株々の帳面ニ相約差上申候趣少も相違無御座候 以上



万延元年北灘組大風雨高潮による損亡記録 鳴門市 山田嘉昭蔵

榑木村与頭庄屋

七月廿二日

板野勝浦

御郡代様御手代

村田芳郎 殿

万延元年七月廿九日

勸農堤塩浜堤切口間数取調子帳

一 畠地堤切口壹ヶ処	長六間	南浜村	一同井利場切口壹ヶ処	同三間半	大桑嶋村
一 塩浜堤切八ヶ所	間数四拾五間半	齋田村	一 畠地堤切壹ヶ所	間数拾間	
一 塩浜堤切六ヶ所	間数貳拾五間	黒崎村	一 塩浜堤切貳拾八ヶ所	間数貳百貳間	小桑嶋村
一 塩浜堤切拾貳ヶ所	間数七拾壹間半	明神村	一 勸農井利壹ヶ処	間数七間	
一 塩浜堤切貳拾ヶ所	間数百四拾三間半	小嶋田村	一 塩浜堤切八ヶ所	間数六拾七間半	北浜村
一 塩浜堤切貳ヶ所	間数拾壹間半	高嶋村	一 塩浜堤切壹ヶ所	間数拾三間	弁才天村
一 塩浜井利場切七ヶ所	間数百拾七間	三ツ石村	一 塩浜堤切七ヶ所	間数五拾間	立岩村
一 塩浜堤切貳拾八ヶ所	間数貳百七間半		一同井利場壹ヶ所	間数八間	
一 塩浜堤切八ヶ所	間数七拾壹間半		一 畠地堤切壹ヶ所	間数四間	
			一 塩浜堤切五ヶ所	間数五拾六間	里浦

上原安兵衛 印

(鳴門市 山田喜昭蔵)

史料(六)

乍恐申上覚

(鳴門市 山田喜昭蔵)

川原場	一 長十九間程	谷川除石堤崩	一 勸農堤切五ヶ所	間数貳拾八間半	粟津浦
兵四郎西	一同四十三間程	右同断	一 井利場壹ヶ所	間数七間	
弥太郎西	一 卷ヶ所	右同断	一 勸農堤三ヶ所	間数貳拾壹間	岡崎村
一 卷ヶ所	石蔵	右同断	同井利場切合貳ヶ所	間数八拾八間	
吉成寺西	善助西	右同断	畠地堤切合三ヶ所	間数百三拾七間半	
一 卷ヶ所	同	右同断	塩浜堤切合百三拾三ヶ所	間数拾四間	
一 卷ヶ所	同	右同断	同井利場合拾九ヶ所	同貳拾間	
長井ノ西	同	右同断	以上	同九百六拾四間半	
				同百貳拾八間半	

一 石炭 四車 匠矢

一 高尾産炭 匠矢

一 塩浜井利場切七ヶ所

一 日産知 匠矢

一 建極 中音産炭 匠矢

一 石炭 音七車 匠矢

一 水産 音七車 匠矢

一 俵家 音七車 匠矢

一 高尾産炭 匠矢

三ツ石村

勸農堤塩浜堤切口間数取調子帳

鳴門市 山田喜昭蔵

- 一長四十三間程 石堤
- 内二十一間程切込申候内二十二間程ハ腹崩
- 但 右之根通石破戸数ヶ所被為仰付置候処破損仕候同処上
- 一長十一間程 石堤崩
- 権助西
- 一壺ヶ所 石破戸 右同断
- 野神
- 一長六十間程 石堤破損 此根通石数ヶ所蔵被為仰付置候所右同断
- 同所ノ上より馬場上迄
- 一七ヶ所 石破戸破損
- 同所
- 一長六拾八間程 石堤切込
- 下井ノ西
- 一長五十間程 右同断
- 下井頭より中井頭迄
- 一七ヶ所 石破戸破損
- 上井戸
- 一用水井理 壺ヶ所
- 鍛冶屋谷
- 一壺ヶ所 用水川原堀埋
- 同処井口
- 一長八間程 石堤崩
- 山伏屋井口
- 一壺ヶ所 用水川原堀埋
- 一同所埋井利六間敷流失仕候
- 浄土寺
- 一壺ヶ所 用水川原堀埋
- 此内十八間程埋井理被為仰御座候所拾四間程流失同四間
- 取留御座候
- 同処井口
- 一長拾六間程
- 同和下
- 一同六間程 石堤根はれ 此根通石破戸被為仰付置候所破損仕候
- 同所下
- 一同三拾四間程 石堤破損 此根通石破戸数ヶ所右同断
- 同所下
- 一同拾四間程 右同断 此根通石破戸数ヶ所右同断
- 同所下
- 一同拾四間程 右同断
- 塚はな
- 一同拾九間程 石堤崩
- 同
- 一同四拾五間程 石堤破損 此根通石破戸数ヶ所右同断
- 善兵衛東
- 一同四間程 右同断

- 同
- 一同四拾貳間程 右同断 此根通石破戸数ヶ所同断
- 牛ノ宮北
- 一同六間程 石堤崩 此根通石数戸二ヶ所同断
- 同所下
- 一同拾八間程 此根通石破戸同断
- 惠左衛門東
- 一同拾六間程 右同断 此根通石籠数ヶ所右同断
- 同所下
- 一同十間程 右同断 此根通石籠右同断
- 同所下
- 一同八間程 右同断 此根通石籠右同断
- 坂田
- 一同拾四間程 堤切込
- 同
- 一同拾四間程 堤切込
- 十七
- 一同式拾五間程 右同断

右之通当村勸農御普請所は十二日夜洪水に破損仕奉迷惑仕候此後少々之出水にも押込表作取調不申場所も御座候に付百姓共至極奉迷惑仕義に御座候間乍恐御慈悲之上御見分被為遊御普請致仰付被下候は、難有可被存候 以上

文久三年午ノ八月

庄屋

五人與

御目路見所 様

(板野郡誌)

火災・海難

撫養は阿波國のうち数少ない郷町の一つであったから人家稠密で、火災が発生すると大きな災害を蒙った。「戸辺集」馬目木弁財天宮の項に記されているように、宝曆十一年（一七六一）十一月十三日夜には四軒家に大火があり、一四〇軒の家が焼失（文化六年現在、家数六二〇軒、内寺一軒を含む）したのもその一つである。その折、齋田・南浜が非常に混乱したので林崎浦が郷町同断に認可されるようになった。

一方、港町でもあったから廻船が多く出入して、海難に逢った者も数多くあり、漁船の被害を受けることもたびたびであった。「重墨新話」に見える初太郎（一八二三―八九）の漂流や、天野屋持船の「幸宝丸の遭難」及び「青ヶ島への漂流記」・「高島村弥兵衛の唐土へ漂流」・「堂浦の百人流れ」など数々の物語りが残っている。

堂浦の百人流れ

文政四年（一八二二）三月十九日、紀伊水道の印南沖へ堂浦・北泊の漁船三〇数隻が一本釣のため出漁したが、天候が急変して悲惨な災禍を蒙り、紀州の漁港へ辿りついたのは僅か一隻に過ぎず、死者一〇六人（堂浦九九人、北泊四人、樺泊一人、讃州引田浦二人）これを「堂浦の百人流れ」という。（五 漁業に詳述）

この外、漂流には次のような談が伝えられている。

初太郎の漂流

天保十二年（一八四二）八月、板野郡岡崎村市太郎の子初太郎が乗っていた兵庫西宮町中村屋伊兵衛の持船永住丸（船頭善助はじめ一三人乗り一二〇〇石積）は、塩・砂糖・線香・豆・食糧米一五俵を積込んで二十三日兵庫を出帆した。九月十八日相模国浦賀につき、豆を陸揚げして翌十九日出帆、奥州南部領へ向けて船を走らせたが強い東風が吹荒れたので豆州の方へ乗戻し大網代港に入って避難した。十月四日そこを出発して十二日の夕方には下総国犬吠岬沖にさしかかったところ、激しい西北の風が吹荒れて船が翻弄されたから仕方なく急いで荷物を海中へ投げ捨て、帆柱を切断し、安全を神に祈った。

櫓槳を失った永住丸は一二〇日ばかり太平洋上を漂い、通りかかったイスパニア船に助けられ、その船に乗って六〇日ばかり東へ航行し、北アメリカのカリフォルニア半島（現在メキシコのカリフォルニア半島）マサトランへ着き、サンホセのミゲリ、チョウサの家に宿って此処で二〇〇日余世話になった。利発な初太郎は家族に愛されて、その娘と夫婦にしようとする様子も見えたが帰郷の念止み難く、アメリカ船に便乗して支那広東省澳門（マカオ）に渡り、そこから寧波（ Ningbo ）に送られ、乍浦（ Zhaupu ）に行き、天保十四年（一八四三）十二月長崎に送還せられた。そこから出迎える阿波藩の使臣齋藤寛作に伴われ、天保十五年八月徳島に帰着した。そして八月二十二日には徳島城内のお庭に召出され、漂流の次第を逐一問に應じて申し上げた。酒井順蔵がその始末を書綴り、画を守住定輝が描き、儒者前川文蔵（号は秋香）が

一書にまとめ儒員那波希顔が序を書いた。これが「亜墨新話」である。

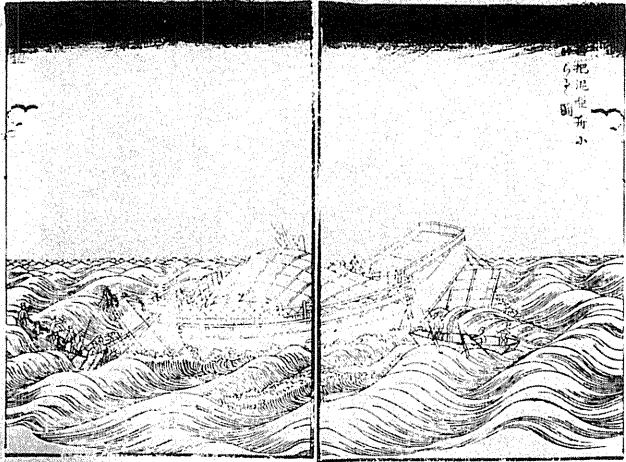
これは嘉永七年（一八五四）

「海外異聞」（一名「亜墨利加新話」全五巻）として刊行せられた。

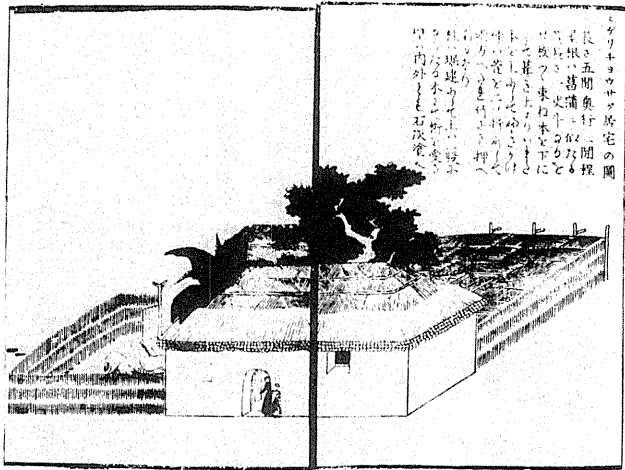
幸宝丸の漂流

弘化元年（一八四四）十二月

二十一日撫養を出帆した天野屋兵右衛門持船幸宝丸（一二〇〇石積、船頭徳之丞始め一一人乗り）は齋田塩六一五〇俵、肥後米一五〇俵、藍玉一五七本、貝一〇六俵を積込んで橋浦へ向かった。十二月二十六日西風が吹いて追手風となったので橋浦を出帆して東に向かったが、紀州田辺の沖合で北風になり、夜五ツ時には風雨烈しく高波大しけとなったのでやむを得ず積荷を捨てて船足を軽くし風波をしのいだが紀伊・土佐の間の沖へ流れ、打続く強い西北の風に

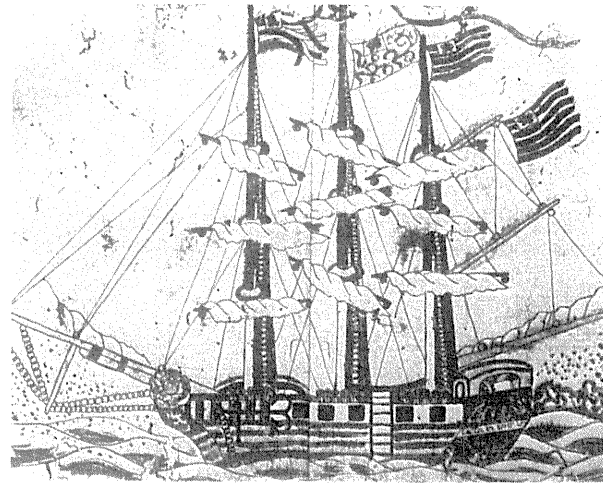


初太郎イスパニア船に助けられる図 「海外異聞」による



ミゲリ・チョウサの居宅 「海外異聞」による

梶は折れ、船は沖合を漂流して紀州から熊野―伊勢―遠江―伊豆―房州沖へと漂った。そのうちに船は諸方が傷み、一同は心痛み観念して中には前途を悲嘆する者もあった。翌年正月十二日に、飲み水が無くなり苦勞した。小島に近づき上陸しようとしたが屏風を立てたようで近付くことも困難であった。ようやく上陸して十三日から岩島に住み快晴のときは磯へ出て魚貝を採って食料にした。諸神仏に祈ったが二月十日は讃州金毘羅の祭礼であるから流木を集めて積み重ね火を焚つけ、火を見て助け舟も来るかと一心に金毘羅さまに祈願した。二月八日になって朝沖合に船影を



幸宝丸乗組員を救助した船 「幸宝丸漂流記」による

見つけ、その船も島に近寄ったが黒ん坊も乗っており、言葉が通ぜず困ったが、種々手を合わせて頼み込んだところその外国船では乗員が不足していることがわかり、食料を与えてくれ気味悪い中に手厚く扱ってくれた。その船に乗せてもらって島を離れ、南風によって走り、途中で奥州南部領釜石の舟で難船していた人も乗せて上総国守谷村へ全員上陸したが、三月一日―二日は大風雨で六日になって風和ぎ浦賀に帰着した。この事柄を書いた「阿波幸宝丸漂流記」には、助けてくれた船はアメリカの船アンケリヤ号といい、船頭名はカビタンと呼ばれ、その船の長さは一九間五尺五寸と記されており、船の略図も筆写されている。米をライスといい、菓子パンと呼ぶ。西洋流数字を怪しげな筆記をして1(ヲハン) 2(トウ) 3(テレイ) …… 8(アイ) 9(ナイ) 10(テン)と記している。

#### 青ヶ島へ漂流

板野郡撫養岡崎村の悦五郎は、平生貧しく紺屋染物の手伝いをしてきたが、ある時紀州へ行って綿実を買おうとある船頭と相談して二人で小舟に乗り、岡崎を出発したが、紀州和歌山沖まで来なかったとき、疾風に逢い、一〇日余りも洋上を漂った。食糧は尽き船は損じ船具を失い絶望的な気持ちになっていたとき、ある朝見ると小島に近寄っていることがわかった。

上陸してみると日本人が居た。この島は青ヶ島といい、八丈島に属することが分かったので、その庄屋へその日本人と一緒に行った。雑穀で作ったものではあったが食糧は豊かで、筆紙によって庄屋と話を通じ、島の生活に慣れようと藪を飼い、八丈縞絹の糸を染めて彼地の人々に伝授したので島人は大いに喜んだ。悦五郎がこの島に永住するよう強く希望したが、悦五郎たちは故郷へ帰りたい旨を繰り返して願い、故郷へ送り返されるよう依頼して止まなかった。便船をもって八丈島まで送りつけられた。ここで二―三カ月留まって後、八丈丸という船に乗せられて伊豆大島へ渡り、別の舟で江戸へ着き、蜂須賀藩邸へ収容された。折よく撫養四軒屋の世渡屋船が江戸へ着いていたのでその船に乗って帰途についたが、志摩の鳥羽沖でまたこの船が難船し、乗組員や最初から行を共にした船頭は流死したけれども、悦五郎は助け舟に救われて生き残り、伊勢の阿波問屋で世話になっていたが、三年を経て岡崎村へ帰着した。

#### 高島村弥兵衛の漂流

文化六年(一八〇九)十一月、高島村の弥兵衛が乗り組んだ大坂の天徳丸は、江戸を出て遠州灘まで帰ったところ激しい南風のため帆柱が折れ太平洋上を漂流して中国へ流れ、かの地で種々苦勞して翌年十二月二十三日長崎へ帰った物語りが「阿州高島村弥兵衛唐土江漂流舟物語」に記されており、その大要は次のとおりである。

文化六年(一八〇九)十月十六日、大坂西横堀富田屋吉左衛門の船天徳丸(千五百石積、船頭水主合計十五人乗組み)は真綿類

を積み大坂を出帆した。十一月一日江戸へ着き荷物を陸揚げしたがこのとき乗組員のうち一人脱落し、高島村弥兵衛(歳三十一)淡州津名郡尾崎村弥吉(歳二十九)ら十四人が茯苓・干鰯・煙草・ろうそく・明礬などを積み込み、同月十七日江戸出帆、十八日浦賀御番所のお改めすみ、遠州灘を経て二十一日朝、伊勢路へかかり八ツ時(午後二時)尾崎(大王崎)沖まで来たところ、にわかにも南風が吹出し、どうにかして地方に寄せたいといずれも種々働いたが、北西風が吹出して地方は寄せることができずの上大雨がしきりに降り、しかたなく風に任せて江戸のほうへ志した。そのうち夜に入ったので帆をおろし梶で夜中四ツ(午後十時)ごろまで走ったが大波となり帆柱が折れた。二十二日朝には伊豆七島沖四十五里ほど出たように覚え東へ東へと波風に任せて流れ屋過ぎには日本の地を離れた。

その夜皆が相談し梶を入れ六七十貫の碇を百尋もある綱で入れたが海底へは届かず碇を引きながら東の方へと流された。十一月二十九日波が高くなり、その晩碇を切りはなし梶をたて巳午(南南東)の方を志し、少々の風が吹いたので長い物を帆柱に地上って死にたいと思つて流れていた。十二月五日ごろまで南へ南へと流れたが、日ましに暑さが増して来た。十二日になつて南風が殊の外強くなり、十三日の昼過ぎまで厳しく吹いた。乗組員一同は神仏に祈願をこめた。同晩四ツ時(午後十時)過ぎから風が西に替り最早日本に帰るべき望みなく、ただ風に任せて流れた。十九日になつてまたまた南の風に変わり、日本へ帰りたいと思つたがどうすることも出来ず、二十日朝になつて北風が吹き、西を志したいと船のともへ帆をひろげて流れ、二十四日に荒ぶいて道具や荷物を捨てた。途中島を見つけたが近寄りたく、翌年正月までたゞ西へ西へと流れたが、とても助からないと観念し元日には米を炊いて食べた。正月十一日までまた西へ西へと流れたが飯糰が切れて苦しんだ。その後はかき、魚を取つて食い飢えをしのいだ。二月一日食事のことで乗組員が二派に別れて喧嘩となり、食つてしまふという八人は舳へ、残して置くといい六人は艫に分れた。二日夜大雨が降り、飲料水を得て大いに力を得、翌三日には魚を採り少々残してあつた味噌を入れて炊いて食べた。船は西へ西へと走つたが二月二十三日ごろ北へ二十五日暮から西へ流れた。しかし、このとき米は一粒も無くなつて一同大変心細くなつた。三月十三日夜火を見つけたので浅瀬へ乗り上げ上陸して十四日(遭難してからその日まで漂流すること百十三日)に一里半ばかり行つてみると人家が二軒あった。「聖王真」と書いた軸物を掛け線香を立てその前で琴・三味線・鉦をならしていた。琉球かと尋ねると先方は琉球人と心得、飯をくれた。種々尋ねて見たが言葉が通ぜず困つた。ヨウキウという所へ送つてくれ、その役所では唐人が多く見物に来たが役人が棒で追払つてくれた。乗員たちは種々話しかつたが、どこであるか見当もつかなかつた。そこで日本と書いて見せたが、通じなかつた。それから近くの寺へ連れて行つて食物をくれ

その寺に泊つた。その寺は黄檗宗の由で額に山三室と書いてあつた。

十六日になつてそこからタイワン(大宛)へ三十六里(六丁一里)の道を送つてくれ城内に連込まれたが、町家は空家が多くの羅・植付が見られた。二十一日から宿をくれたが、宿所は大家のようであつた。ここへ福州(フウチョウ)の王様が来ていたが三月二十七日その王様の前に出た。一人一人に織物をいただいて退出し、後から役人が来て唐銀六つ、白米四俵、焼酎一壺、あひる十四羽、雞十四羽、川鱒十四本を主様からといつて賜つた。四月二十六日までここに逗留し、二十七日駕籠十四挺で鹿岸へ送られた。五月三日船をうけ四日には十里ばかり走りその夜は順風で百里ばかり走り、九日申の刻(午後四時)福州の港に入った。翌日下船して駕籠で十里ほど送られ観音堂のようなどころで十日ほど逗留した。二十一日ここを出て竹駕籠十四挺で陸地旅行をし川船に乗りかえ、二十五日福州のユウシワンへ着き、六月十五日セツカン(浙江?川舟船所)へ着き、駕籠に乗り同日ケンシユウ(ケンシユーフ)へ着いた。ここまで大宛と福州の役人が付添つて送つてくれ、役人共は帰つて行つた。二十六日また駕籠に乗りケンシユウを出立し、三里ばかり行つてまた川船に乗り、六月二十八日昼時午浦(チアプー)へ着いた。ケンシユウから午浦まで唐人が朱塗の船にびいどろ(ガラス)の障子を入れた結構な船で送つてくれた。午浦からも重役人と見える人が供廻りを大勢を召連れて出迎え、ケンシユウの役人とあいさつし書き物を交換した。ケンシユウの役人は帰つた。私たちが乗つた船は直ちに午浦の町中の川半まで行き上陸した。茶店のようなところで休息し菓子をめいめいにくれ、つづいて問屋のような処へ連れて行かれ町家の二階の上で七月から十二月四日まで逗留した。十二月五日午浦を出帆し同二十三日長崎へ着いた。このとき、薩州からも二十六人が漂流してこの午浦へ来ており、私共と合計四十人が舟四艘で長崎へ送つてくれたのである。この事につき公儀から船一艘につき米百俵、塩百俵、赤銅百本づつ下さつた由である。この午浦という所は大きな港で毎年漂流舟があるそうである。私たちが逗留申籠並に扶箱一つ、ふとん・ばちなどその節の着類をくれたが帰つたとき残らず御郡代御役所でお目にかけた。

(阿州高島村弥兵衛唐土江漂流舟物語 鳴門市 岩村武勇蔵)